

氏名	DALKIRAN AYŞE NUR
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 5008 号
学位授与の日付	平成 26 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則 (文部省令) 第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	日本語とトルコ語の属格形式に関する対照研究
学位論文審査委員	主査・教授 栗林 裕 教授 宮崎 和人 准教授 堤 良一 教授 辻 星児

学位論文内容の要旨

本研究は、現代日本語と現代トルコ語の属格を表す形式を検討し日本語教育の現場で直面する問題の解決に貢献することを目的とする。また本研究では、実例をもとに、トルコ語と日本語の属格形式における類似点と相違点を解明するための電子的パラレルコーパスを基礎的資料として作成した。

本論文は次の 7 章から構成される。

第 1 章では、研究の動機とその目的について述べ、日本語とトルコ語の一般的な特徴及び両言語の格形式全般を概観した上で、対照研究と誤用研究の先行研究について述べ、本研究の位置付けを行う。

第 2 章では、現代トルコ語の文法書におけるトルコ語の属格語尾の定義を確認し、日本語とトルコ語の「名詞＋名詞」の構造を比較した上で、名詞と名詞の結び付きの構成要素が作りあげることができる様々なタイプを取り上げる。次に、「名詞＋名詞」の組み合わせによって作られる所有構造と名詞修飾の特性について述べる。先行研究の実例やカテゴリーを基に、日本語の属格助詞「の」の用法カテゴリーの作成を試みる。このカテゴリーに基づき、日本語の属格助詞「の」の用法に対応するトルコ語の語尾を見ることによって、トルコ語の属格語尾の類似する用法と相違する用法を明確にする。次に、日本語の属格助詞「の」の用法に対応するトルコ語の格語尾や他の語尾の形式上の類似点及び相違点を提示した上で、日本語の「の」と相違する語尾をまとめ、トルコ語で属格を表すこれらの語尾の特徴や機能について考察する。次に、属格語尾の用法を表すことができる語尾とそれらの持つ他の用法についての表を提示する。

第 3 章では、まず、日本語の文法書における格助詞の「の」の定義をする。それらについて記述がある用法を取り上げ、これらの研究における用法を表に示す。加えて、日本語で書かれたトルコ語の文法書における属格語尾の (-n1n) の定義と用法を概観し、これら

の研究における用法を表に示す。次に、用例収集及びデータ分析の方法について述べる。日本とトルコの文学作品における日本語の格助詞の「の」及びトルコ語の格語尾の(-n1n)の出現する原文とそれらの対訳文から作成した日土対訳データベースをもとに、日本語の「の」の用法に対応するトルコ語の形式、トルコ語の(-n1n)の用法に対応する日本語の形式を明らかにする。次に、日本語の文学作品のトルコ語訳及びトルコ語の文学作品の日本語訳の対訳文における日本語の「の」及び属格語尾の(-n1n)に対応する形式と用法を原文とともに提示する。さらに、日本語とトルコ語の属格形式の対応関係について考察を行い、トルコ人日本語学習者が格助詞の「の」を使用する際におかす誤用と関係を持つ可能性のある形式とそのような可能性が低いと考えられる形式について検討する。さらに、本研究により明らかになったトルコ語と日本語の属格形式の対応関係を表に整理し、筆者の予測するトルコ語の属格語尾のその他の用法について述べる。

第4章では、第3章で明らかにした両言語間の対応しない用法が、トルコ語を母語とする日本語学習者の日本語の格助詞「の」の使用にどの程度の影響を与えているかを3種類のアンケート調査によって明らかにする。更に、日本の大学に留学しているトルコ人日本語学習者とトルコ共和国チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学日本語教育学科に在学するトルコ人日本語学習者を対象に実施したアンケート調査の誤答をもとに分析し、「の」格の誤用を引き起こす原因を解明する。

第5章では、第3章で明らかにした両言語間の対応しない用法がトルコ人日本語学習者の日本語の格助詞「の」の使用にどの程度の影響を与えているかを学習者の日本語作文に基づきながら明らかにする。学部2年生の作文の授業の課題として出された自由作文を調査し、「の」格の誤用を明確にし、それらの誤用の原因を追究し両言語の対応しない形式と母語干渉と誤用の原因となるその他の要因を明らかにし、母語干渉により起こる誤用の全体における割合を明らかにする。

第6章では、「日本語の格助詞の「の」の用法とそれに対応するトルコ語の格形式とその用法、またトルコ語の格語尾の用法とそれに対応する日本語の格形式とその用法に存在する差異がトルコ人日本語学習者の格助詞の習得と使用に影響を与え、誤用の主要な原因となっているのではないか」という仮説の妥当性を探る。まず、第3章で作成した日土対訳用例データベースから明らかになった両言語間の相違点と、第4章で行ったアンケート調査に現れた学習者の誤答との関係を探り出す。ここでは、単に両言語の属格形式が相違する問題に比べ、対応するトルコ語にいくつかの形式が使用可能である用法を問う問題がより多くの誤答を出しているということ、トルコ語逐語訳付きの誤答数・誤答率表にて示す。次に、日土対訳用例データベースから明らかになった両言語間の相違点とトルコ人学習者の作文調査に現れた誤用にも同じような結果が見られ、母語干渉は誤用の主要な原因となっていることを表にして示す。最後に、トルコ人日本語学習者の「の」格の誤用を防ぐために考えられる教授法について提言をする。対照分析による研究と誤用分析による研究との間の関連性について述べ、本研究論文で明らかにした結果の日本語教育の現場での実用性について論じる。

第7章は、本論文で論じた研究の内容とその成果を総括である。

学位論文審査結果の要旨

論文審査会において、学位申請者が学位論文に基づきながら、まず本研究の背景と現状について説明し、研究の動機と目的を明らかにした。次に本研究全体の構成の概略が示された。分析をするデータの採集法と分析方法について述べられた後、研究に当たっての基礎知識として、研究対象とするトルコ語及びトルコ語と日本語の属格を表す格形式について略述した。最後に、応用言語学研究の流れ、特に対照研究と誤用研究の意義や先行研究を概観し、最後に本研究の位置付けを行なった。その後、論文審査委員による質疑応答が約二時間弱にわたって行われた。

これまで日本の言語研究の分野において、日本語との対照を目的としたトルコ語学・トルコ語教育の研究は極めて少ない。本研究のテーマである日本語の格形式は、日本語学においても日本語教育学においても極めて重要な問題であり、今まで個別言語研究の枠内で多くの研究がされてきた。しかし、日本語とトルコ語の格形式をテーマにした対照言語学的な研究は殆どなされていないのが現状である。本研究は外国語として学習した日本語における属格助詞の「の」と、母語であるトルコ語の属格語尾の (/-(n)ın/, /-(n)in/, /-(n)un/, /-(n)ün/) の対照研究であり、その応用言語学的な貢献を目指すものである。

本研究論文の意義は主に5つにまとめることが出来る。

1. 日本語の格助詞の「の」と比較・対照することにより、トルコ語の属格語尾の (/-(n)ın/) の他に [所有・所属] の用法を持つ語尾に注目し、それらの性質やこれまで分析されなかった機能について記述した。トルコ語の「所有・所属」の用法を表す語尾には、属格語尾の (/-(n)ın/) の他に、語尾無しの (ϕ)、奪格語尾の (/dan/)、処格語尾の (/da/)、処格語尾の (/da/) と所属語尾の (/ki/) の組み合わせからなる (/daki/)、派生語尾の (/lı/) と (/lık/) もあることに着目した。
2. 日本語の格助詞の中でも特に学習が難しいとされている「の」格の用法を、日本語とトルコ語で書かれた文学作品とそれらの翻訳をもとに作った対訳用例データベースに基づき、両言語の属格形式の類似点及び相違点を明らかにし、その対応関係を探った。
3. 両言語の属格形式の類似する用法と相違する用法の一部について、初級教材における用法をもとに作成したアンケート調査によって、トルコ人日本語学習者がそれらの用法を使用する際に犯す誤用を分析し、「の」格の用法で誤答が多い用法及び学習者の「の」格に関する誤答の母語干渉以外の原因を追究し、その性質を記述した。
4. チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学にて日本語教育学を専攻しているトルコ人学習者の自由作文における「の」格の誤用の種類と原因を明らかにした。
5. 両言語の属格形式の相違する用法と、アンケート調査によって明らかになったトルコ人日本語学習者の「の」格に関する誤答、及び学習者の書いた自由作文の誤用分析によって示された「の」格の誤用との間に一定の関係があるか否かを探り出し、その実状を明らかにした。

本研究の目的は、両言語のいわゆる属格と言われる格形式の日本語とトルコ語における対応関係を探ることであり、言語表現を表す形式をはじめとし、それが表す意味用法に及ぶ類似点や相違点を明らかにすることにより、トルコ人日本語学習者が習得時及び使用時に困難を感じ、多くの誤用をする背景に存在している原因を究明することである。

本研究では、現代日本語と現代トルコ語の言語資料を幅広く収集し、言語学習者の誤用

の背景にある原因は多様で、それらが複雑に絡み合っていることを述べた。その結果、学習者の誤用の全ての原因は言語間の差異のみに依るものではないものの、主要な要因であることを示した。質疑応答の過程で、審査委員の中からは主に1) 分析が表面的であり、「なぜ相違がみられるのか」という問題点に答えるという原因説明に関わる論考や、一般化すべき結論の提示に乏しい、2) アンケート分析の数値の提示の仕方に分かりにくさがみられる、3) 誤用の要因とされ、提示された理由の客観性に乏しい等の問題点の指摘がなされた。

本研究はA4判本文256ページ資料編約244ページにわたる大部な研究であり、特に日本の文学作品のトルコ語訳および、トルコを代表する文学作品の日本語訳に出現する属格表現を比較したパラレルコーパスを作成し、それを丹念に対照させた点は大きく評価できる。日本語とトルコ語に特化したこのようなコーパスは存在せず、基礎資料としてトルコ語圏における日本語教師及び研究者、また日本語圏のトルコ語研究者だけでなく格に関する研究を行っている言語研究者や翻訳論等の応用的研究にも有益であると考えられる。

以上をもって、論文審査委員全員一致で合格と判断した。